

新自由主義の「暴力」を告発する

『図書新聞』3042号、2011年12月17日に、社会学者の渋谷望氏が2面にわたり、『ショック・ドクトリン』を解説しているので抜粋して紹介する。

本書の最大の特徴は新自由主義「御用学者」がこの30数年のあいだ、世界の民衆に対して行使してきた「暴力」を掘り起こし告発する点にある。彼女が掘り起こすのは、御用学者が教科書的に何を主張してきたかではなく、実際に何を行ってきたかである。言説のレベルではなく、実際の行為のレベルの批判である。

クラインが執拗に焦点を当てるのは新自由主義の導師、ミルトン・フリードマンである。彼女は、フリードマンの考えと行動のなかにこの暴力への要請が書き込まれていることを見出す。フリードマンのアイデアを初めて実行に移した社会、チリとフリードマンの関係の記述が、大きな比重を占める。これが、序章、終章を含め全23章中での出だしの5分の1ほどである。

その後の世界を津波のように巡るこの暴力の軌跡を追いかける。イギリス（サッチャー）、80年代のアルゼンチン、「移行期」のポーランド、天安門事件の中国、アパルトヘイト後の南アフリカ、エリツィンのロシア、97年のアジア「危機」。さらに地球を周回したこの暴力は、2000年代になってブッシュ（息子）政権のときについて米国自身のもとに帰っていき、米国民に襲いかかる。それは対テロ戦争を通じ米国市民全体に、ハリケーン・カトリーナを通じてその被災者に襲いかかる。さらにそれはイラク戦争を通じてイラクの民衆にも襲いかかる。

本書は近過去の歴史の「語り直し」である。それは新自由主義の視点から語られたオフィシャル・ストーリーを民衆の立場から書き換える壮大な試みである。

クラインは軍事的暴力と新自由主義の両立は偶然ではなく必然的なものだという。なぜなら新自由主義を実行に移すには民衆の連帯という具体的な障害を破壊する必要がある、そのために暴力が必要だからである。そしてチリではこの暴力は軍事政権によるテロというかたちをとったのである。この暴力により、人々は「ショック」を受ける。人々は茫然自失となり、民衆の抵抗は限りなく小さくなる。人々はこのときいわば「白紙状態」となる。この間に新自由主義の「改革」が一気に進められるのである。

ところでこの暴力は必ずしも物理的なものである必要はない。人々に心理的ショックを与えるものであれば何でも構わない。クラインは様々な惨事/災害は「ショック」を引き起こすという。それは津波やハリケーンのような自然災害、戦争のような人為的惨事、インフレのような経済的惨事についてもあてはまるという。そしてフリードマンをはじめとするエコノミストたちは、この惨事/災害によるショックを意識的かつ効果的に利用し、これにつけこみ、人々にショックを与え（あるいはそのショックを増殖し）、彼らの連帯を破壊し、新自由主義を導入してきたのだという。

(2023年6月16日)